

Rennat Declerck, When-Clauses and Temporal Structure, London: Routledge, 1997., xiv+283pp.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/47937">http://hdl.handle.net/2297/47937</a>

だから、一方の女性が彼自身の「他者」、すなわち自らの目的や意志をもたない役を当てられるのは必然的ともいえる。実際、ジャクソン自身、今日のロマンスの多くの女性主人公が未だに一方的に男性に「情緒的働き」を捧げる養育者の人物であることを強調しており、最終的には序論に水をさす結論を提示している。すなわちいかに局部的には進歩的な多様性を示そうとも、大多数のロマンス小説は究極的には未だに Mr. Right を見出すことを至上の目的となす女性たちの物語であり、それゆえフェミニストたちは今後もロマンスや愛の言説を体制のイデオロギーとして警戒することを怠らず、批判し続ける必要があるということなのである。

以上、本書に示された二様のロマンス観を見てきた。両者の相違は、明らかに、現在、popular culture に関して交わされている二つの相異なる立場に立脚するものとも見られる。すなわち、かつてフランクフルト学派が示した popular culture 観——それを、大衆を操作する悪しき消費文化としてとらえるもの——、および、近年スチュアート・ホールなどが提唱して広く受け入れられるようになった新しい見方——大衆の一人一人が能動的に参加して、そこから個別の意味を引き出しうるものとしての popular culture 観——である。実際、本書はロマンスに焦点をあてた有意義な popular culture 論としても読め、流行中のカルチュラル・スタディーズに寄与する貴重な一冊であるともいえよう。

最後に、今一度ロマンスに言及しておく、男女にかかわらず、個人が他者との間に真に相互的な親密さを求める限り、今後もロマンスは存在意義を保ち続けることだろう。ただし当事者の二人が互いに疑似一体感に陥ることなく、相互の差異を常に意識しつつ、たえざる対話を通して互いのダイナミックな変容が可能となるような関係性が求められるとすれば、再び余りにも観念的にすぎるだろうか。いずれにしろ、ロマンスそのものに関する活発な対話を誘発する本書のような本が今後も出版され続けていくことを期待したい。

早稲田大学

——小林 富久子

## Renaat Declerck: *When-Clauses and Temporal Structure*

London: Routledge, 1997. xiv + 283pp.

### 1. 概要

本書 (WCTS) は、Declerck (1991) で詳細に論じられた時制の体系を、When 節 (以下 WC) を含む文の分析に応用したものである。91 年の著書が時制体系自体の説明が中心であるのに対し、本書は豊富な実例を用いて仮説の検証を行っているため、事実観察の面でも興味深い点が多い。

本書の構成は以下のようになっている。

- (1) 1 Introduction  
 2 A Typology of *When*-Clauses  
 3 The 'Temporal Conjunction' *When*  
 4 A Model of the English Tense System  
 5 *When*-Clauses and Temporal Structure  
 6 Canonical *When*-Clauses and the Expression of Temporal Relations  
 7 Special Relative Tense Uses in Canonical *When*-Clauses  
 8 Canonical *When*-Clauses Establishing a Temporal Domain  
 9 The Interpretation of Canonical *When*-Clauses  
 10 Narrative *When*-Clauses  
 11 *When*-Clauses Other than Canonical or Narrative *When*-Clauses  
 12 Conclusion

2章では、本書の分析の対象となるWCを8種類に大別し、その概略的な性質を述べている。時を示す副詞節としての働きがその中の一つに位置付けられているが、これがさらに7種類に類別されている。その中で主節(以下、HC)の事態が起こる時点指定するか、その時点と関連を持つ別の時点指定するWCを典型的WCとしている。本書の主たる分析の対象はこの典型的WCで、3章、及び5章から9章までがこの分析にあてられている。10章は、(2)に示すような、*when*が*and then*と言い換えることが可能で、WCがHC的な働きをする*narrative WC*の性質を述べている。

- (2) I was sitting quietly in the kitchen when suddenly a stranger entered the room. (= and then it suddenly happened that ...) (WCTS: 39)

11章では典型的WC及び*narrative WC*以外のWCの性質が略述されている。

## 2. 典型的WC

3章では、時を示す接続詞の*when*は自由関係詞であり、*at the time when*の意味を持つという主張を、共時・通時的の両面の事実から裏付けている。

4章は、主としてDeclerck (1991)に基づいた時制の体系を、5章以降に必要となる範囲に絞って紹介している。この中で、時制は事態が起こる時点と基準となる時点との関係を示す文法範疇と定義されている。この定義から、英語の時制は現在と過去に限定されず、未来や完了なども含まれることになる。しかし現在と過去の対立は英語話者が時間を概念化する際の二つの時間範囲(*time-sphere*)として残されている。現在の時間範囲はさらに*pre-present*, *present*, *post-present*の三つの区分(*sector*)に分割される。事態が起こる時点が、他の何にも依存しない絶対的時点(通常は発話時、以下 $t_0$ )と関連付けられる場合、その時制を絶対時制と呼び、それ以外の時点と関連付ける時制を相対時制と呼ぶ。

時制が関連付けを行う時点をもTime of Orientation (以下、TO)とし、その中で叙述を受ける事態が起きる時点をも*situation-TO* (以下、STO)とする。従って時制の働きは、STOを別のTOと関連付けることと言い換えられる。また、基準となるTOはSTOを

束縛 (bind) すると言う。文中の、少なくとも一つの時制は絶対時制として TO と  $t_0$  を直接関連付けるが、この絶対時制は「時間領域を確立する (establish a temporal domain)」という。領域に成りうるのは、時間範囲としての過去、及び現在の中の pre-present, present, post-present の三つの区分で、4 種類の領域が存在しうることになる。現在完了も pre-present の領域を確立するので絶対時制になりうる。相対時制は同一領域内の TO 同士の関係を示す。従って、同じ時制でも絶対時制と相対時制の用法が存在する。(3) はそのことを示す例である。

(3) He said he had panicked when the milk boiled over. (WCTS: 72)

said の過去時制は  $t_0$  に束縛される絶対時制、had panicked の過去完了は、この節の TO が、HC の TO に束縛され、かつ STO が時間的に先行することを示す相対時制、boiled の過去時制は had panicked の STO を束縛する TO との同時性を示す相対時制である。

同一文中、あるいはディスコースなどで新たに時間領域が確立されることを、時間領域の転換 (shift of temporal domain) と呼ぶ。また歴史的現在のように本来とは異なる区分で時制が用いられる場合を時間的視点の転換 (shift of temporal perspective) と呼んでいる。

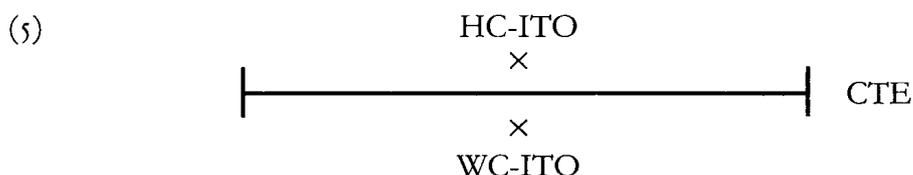
5 章では、WC が時制や時の副詞と結びついてどのような時間構造 (temporal structure) を作り出すかを論じている。時の副詞は時間構造の中にある部分の時間を指すが、その時間及び文脈上指定される時間を既定時間 (time established、以下 TE) と呼ぶ。TE と STO の関係は時制では示されないので、時間構造と時制構造は区別される。副詞が指す TE が STO を含む場合、その副詞を STO 副詞と呼び、TE が STO を束縛する別の TO を含む場合はその副詞を TO 副詞と呼ぶ。(4a) の yesterday は STO 副詞であり、(4b) の at five o'clock は TO 副詞である。

(4) a. He left yesterday. (WCTS: 105)

b. At five o'clock, John had already left the house. (WCTS: 108)

また、TE に含まれる TO は included TO (以下 ITO) と呼ぶ。STO 副詞では ITO は STO と一致するが、TO 副詞の場合は STO が ITO に時間的に先行したり、後続したりする。(3) の that 節では、had panicked の STO は ITO に先行しているが WC のほうは STO と ITO が一致している。

これらの道具立てを用いて、典型的 WC の when の意味構造は、HC と WC が共通の TE を持ち、HC-ITO と WC-IT が一致しているという形であると主張している。これは、(5) のように図示されている。(WCTS: 112)



CTE とは共有されている TE のことを指す。

このような分析の利点の一つとして、(6) のような文を例外として扱う必要がなくなることを挙げている。(WCTS: 113)

(6) I will do it when I {have / \* will have} time.

WC の現在形は、post-present の領域において WC-STO と WC-ITO との同時制を示しているのであり、 $t_0$  に直接束縛されて時間的に後続することを示すのではないので、未来形が用いられないことになる。

また、(5) の意味構造は、HC-STO と WC-STO の一致を表わしているわけではないので、(7) の文のように時制がこれらの一致を示していても、語用論的にずれて解釈されるいわゆる sloppy simultaneity が予測できるとしている。

(7) When John's car breaks down, he will probably buy a new car. (WCTS: 114)

先に述べた通り、ITO が STO と一致する場合としない場合があり、一致しない場合には、STO が ITO に時間的に先行するか後続するかの可能性がある。これらの可能性は HC と WC に同様に存在するので、典型的 WC と HC が作り出す時間構造の配置は、9 通り存在することになる。

6 章では、4 章で仮定した 4 種類の時間領域と、5 章で仮定した 9 通りの時間構造の配置の組み合わせが、実際に可能であるかを調べることによって仮説の妥当性を検証している。この中で、コーパスなどから多くの実例を引用している点が注目される。

7 章は、典型的 WC の中で、WC-STO と WC-ITO の束縛関係が典型的な場合とは異なるケースをまとめて取り上げており、8 章では歴史的現在のように、WC が独自に時間領域を確立するケースをまとめて論じている。

9 章は、情報構造、主題構造、アスペクトなどが、WC の意味解釈上どのように関わりうるかの可能性を検討している。

### 3. 特徴および位置付け

本書は WC の様々な用法・性質をきめ細かく調べており、特に典型的 WC については非常に詳しい事実観察に基づいた議論を展開している。本書の時制構造及び時間構造に関する体系は、どのような理論的背景を持った研究者にとっても参考になると思われる。用例に関しては、冒頭でも述べたとおり数多くの実例が用いられており、興味深いものも多い。その一例を挙げる。HC が現在完了の場合、過去の時点を示す WC は用いられないとされているが、どのような場合にそのような WC が可能になるかが 6 章 2 節で論じられている。(8) はその議論の中で使われている実例の一部である。

(8) a. I can't imagine how you got hold of that idea. I've always had a Christian name, even when I *was* a baby. (WCTS: 149)

b. Indeed, analysts say that payouts have sometimes risen most sharply when

prices *were* already on their way down from cyclical peaks. (WCTS: 151)

(8a) は HC で示されている継続的状況の一部に WC が焦点を当てている場合であり、(8b) は文全体が習慣的な解釈を受ける場合である。

Declerck (1991) 及び本書は、時制を時点同士の関係付けと捉える点において、Reichenbach (1947) の延長線上にあるといえる。しかし、Reichenbach の体系の部分的修正と言える Comrie (1985) や Hornstein (1990) などと異なり、道具立てを大幅に見直している。

Reichenbach (1947) は、Speech Time (S)、Reference Time (R)、Event Time (E) という三つの時点を原始要素とし、時間軸上における S, R, E の相対的位置関係によって時制を表現している。これに対して Declerck の体系では、(i) S と R の区別をせずに、どちらも基本的には TO として同列に扱う、(ii) 時の副詞や文脈などが言及する時間を R とするのではなく、TE として独立の位置付けをしている、(iii) 一つの時間軸上で三つの時点が相対的に位置付けられるのではなく、TO の間の束縛関係は二つの TO 間に限られ、三つ以上の TO が存在する場合にはそれらの関係を、連鎖的に捉える、といった特徴を持っている。

- (9) a. I had met him yesterday.  
b. I heard yesterday that John had been in London the day before.

Declerck (1991: 230)

(9a) は多義であるが、それは *yesterday* が R を指す読みだけでなく、E を指す読みも可能なためである。(9b) の *that* 節中の過去完了は、Reichenbach の体系では E-R-S (X-Y は X が Y に時間軸上先行することを表す) と分析される。R は *yesterday* が指す時点となるが、そうすると *the day before* が指す時点が時間軸上では表わせないことになる。これらの問題は、R が二つ存在すると考えれば解消する。(9b) の場合、*yesterday* と *the day before* が異なる R を指すということが可能になる。しかし二番目の R は動詞の時制が表すものではないので、副詞が指す時点は時制構造とは別個に導入する必要がある。これは単に (9) のような文を説明するために必要な道具立てというだけにとどまらず、(10) に述べられているような考え方に基づいている。

- (10) . . . , it is more interesting to build a full-fledged theory of time reference than to restrict oneself to the role played by tense. What is more, I do not believe one should even try to build a theory of tense in isolation. A theory of tense must form part of a full theory of reference, and its value can only be judged with reference to the latter.

Declerck (1991: 254)

このような考え方に基づいた体系だからこそ、副詞である典型的 WC と HC の時間関係

を記述することが可能になっていると言える。

Rが二つ以上存在する可能性を認めることは、Sに特別な位置づけを与える根拠をなくすことにもなる。Sは単に一番目のRにすぎなくなるので共にTOとされる。(t<sub>0</sub>もTOの一種である)。また、STOもTOの一つである。

(iii) に関しては (11) などを例にして論じられている (Declerck 1991: 256)。

(11) John said that he would do it

(11) は Reichenbach の体系では、S と E の間の位置関係が三通り考えられるので三通りに多義であるということになるが、実際にこの文が多義であるという証拠は存在しない。一方 Declerck の体系では、HC-ITO は t<sub>0</sub> に束縛されており、かつ that 節の STO を束縛しているが、t<sub>0</sub> と that 節の STO の関係は何も示されないことになる。従って (11) は多義ではなくあいまい (vague) であるということになり、問題は解消する。

このように Declerck は Reichenbach の用いた原始要素及びそれらがとりうる関係を見直すことにより、時制構造をより一般的な時間構造の中に位置付け、より広い現象を取り扱うことを可能にしており、本書もその成果の一つと言える。本書を一読しただけでは、用いられる道具立てが複雑すぎる印象を与えるかもしれないが、きめ細かく事実を観察する枠組みとしては有効であろう。しかしこの道具立てが単なる記述的枠組みと促えるべきか、生成文法的になんらかの意味での心理的実在物と促えるべきかは今ひとつはっきりしない。このような点をはっきりさせるには、ちょうど太田 (1971) が Reichenbach の体系を用いて行ったように、この体系で日本語の時の副詞節を分析し英語と比較することでその位置付けも見えてくるのではないだろうか。

#### 参考文献

Comrie, Bernard. 1985. *Tense*. Cambridge: Cambridge University Press.

Declerck, Renaat. 1991. *Tense in English: Its structure and use in discourse*. London: Routledge.

Hornstein, Norbert. 1990. *As Time Goes By: Tense and Universal Grammar*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

太田 朗. 1971. 「日英語の比較——時制と相について」『英語展望』vol. 34-35.; 『英語学と英語教育をめぐって』、211-252、東京:ELEC

Reichenbach, Hans. 1947. *Elements of Symbolic Logic*. New York: Free Press.

金沢大学

——守屋哲治